

図画工作科と音楽科を合科的に扱った指導 — 1年生「子ども学総論」の授業実践から —

鍵野 いずみ

(名古屋芸術大学 教育学部 子ども学科)

1 はじめに

芸術の世界は「美術」と「音楽」という領域に分かれて語られ親しまれている。しかし、音を奏でたり、形や色で描いたりすることは本能的に人が表現する手段であり、本来はそのような括りは無かった。そうした行為に芸術的な価値を見出し、それぞれの分野で表現の可能性を追求し磨いてきたことで、人類は人種を問わず、文化を築いてきた。本大学で芸術的なセンスを磨いていこうとする目的をもった学生たちに、この授業実践を通して、その原点に立ち返りそれぞれが目指す音楽性や美術性を、関連付けた視点で追及する機会が必要であると考えた。

2 実態

本芸術大学教育学部には、音楽や美術、どちらにも興味関心をもつ意識の高い学生がいる一方で、どちらかに苦手意識をもっている場合も少なくない。教育者としては、両科目を通じて感性を磨く必要があることを学生は理解している。そして、その感性をより高めたい、高めていかなければという意識や意欲ももっている。但し、その手立てとして、それぞれの科目においてテクニックを磨くことに意識が向いている傾向がある。

3 図画工作科と音楽家の横断的学習の意味

上記のような実態の改善を図る題材の開発を目指して、2つの視点で指導の工夫を考えた

- (1) 創造力・想像力を働かせつつも、発想や構想の段階でできる限り躓きが解消できる題材を工夫する。

→ 発想・構想の段階でベースとなるものをあらかじめ用意し、そこから発想を広げていけるような題材を工夫する。

- (2) 子どもへの指導を前提とした技能指導をする
→ 小学校図画工作の範囲内の技能で制作でき、且つ、個々の技量に合わせて技法のレベルアップを図ることができる題材を工夫する。

4 図画工作科と音楽家の横断的指導の工夫

(1) 授業のめあて

- ・音楽を美術的に表現することや美術を音楽的に表現する作品を味わい、興味関心を高めたり、感性を磨いたりする。
- ・モンドリアン、カンディンスキー、クレーの作品を鑑賞し、美術的な知識・理解を深める。

(2) 実践『絵画作品から音楽を感じる』

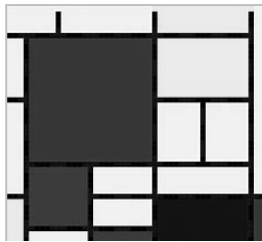
ここで扱う絵画作品は、芸術家の作品と幼児・児童の作品である。プロの芸術家だから描けるということではなく、技術的に、感覚的に未発達な成長の段階においても、可能な表現の視点であることに気づくことが重要であると考えた。

ア モンドリアンの作品を通して

関心意欲を高め、授業のめあてを実感できるように、授業の導入段階で簡単なワークショップを実施した。

『大きな赤の色画 黄、黒、灰、青のコンポジション』の作品を黒い線のみにしたプリントを用意し、「赤、黄、青」3色の色鉛筆で自由に画面の着色をした。作者や作品名を知らせず、使用する色や

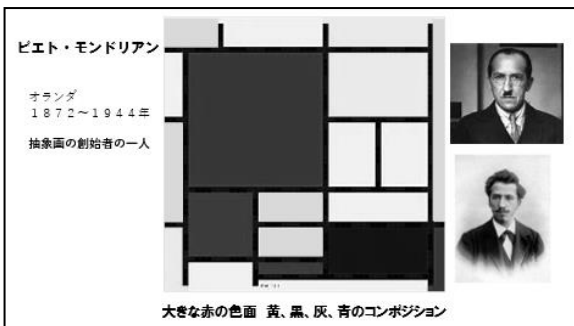
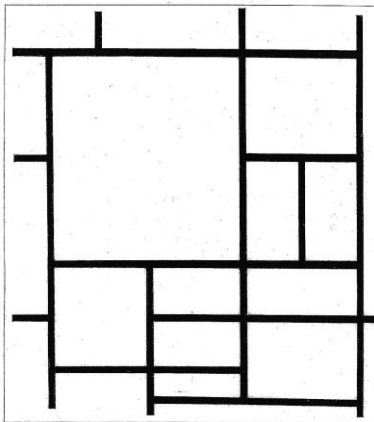
着色時間を限定し同濃度で均一に着色するという条件で行った。個々の考えで配色を考え、単純に着色することは、気軽な感覚で取り組むことができる考えた。唐突さに多少の戸惑いを見せたもののねらい通り、どのような話につながっていくのだろうという興味をもたせることができた。これは、配色の考えには正解不正解はなく、各自の感覚でいろいろなパターンができて楽しめることが確かめられたからだと考える。



ピエト・モンドリアン 1921作
『大きな赤の色面 黄、黒、灰、青のコンポジション』



〈着色用のプリント〉



着色した作品を周辺の仲間と鑑賞し合い、配色の違いで印象が異なることを確認した。その後、モンドリアンの代表的な作品であることと、画家として

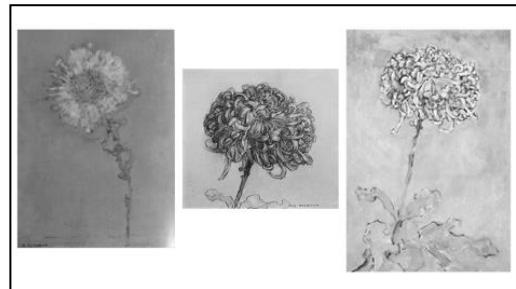
のプロフィールを紹介した。また、「コンポジション」は、「構成、組み立てる」といった意味をもち、絵画作品、音楽、建築、文学など、様々な芸術で使用される言葉であることも伝えた。

その後、モンドリアンが独特の表現を確立した経緯を作品鑑賞をしながら行った。



人物や風景を描いていた初期の時代。

質感や空気感を表す高度な写実的表現のテクニックをもっていることを確かめた。

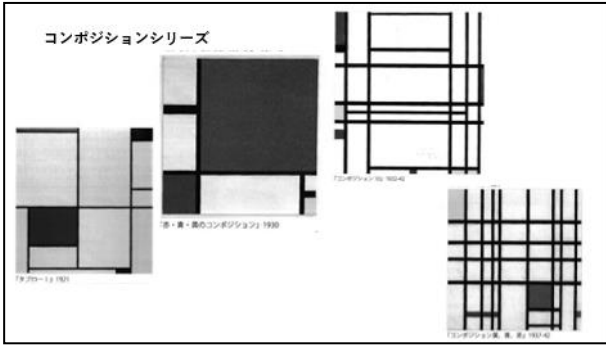


生活のために描いていた静物画にも、同じく正確な描写力をみることができる。画家の生きざまを知ることが、作品の価値をより広く深く考えることに繋がると期待した。

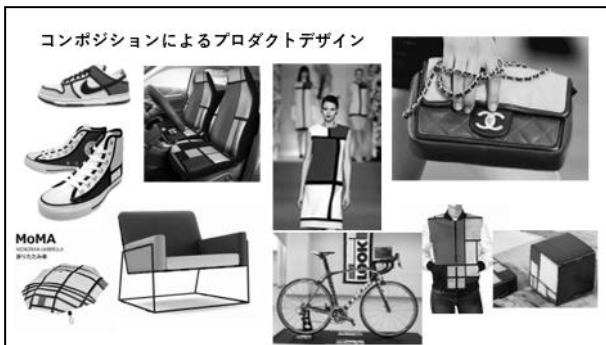


〈花咲くりんごの木 1912年〉

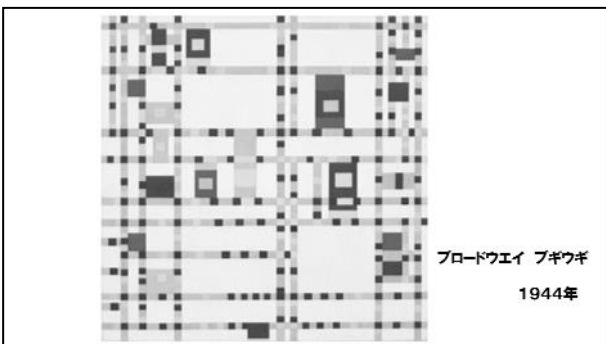
抽象画という概念が無い時代に、たくさんの試作を重ねた結果生まれた代表作「コンポジション」のスタイルにつながっていく代表作の一つ。



コンポジションにもいろいろなパターンの作品があることを知らせる。線、色、形、配置といった造形的要素の構成を変化させることで一つの作品を変容させながら新たな作品が生まれることを知る機会となった。



コンポジションの作品が様々なアイテムとのコラボレーションで生活の中で親しまれている例を紹介する。アートを生活に取り入れ人の心を潤していることを再認識する重要ポイントである。

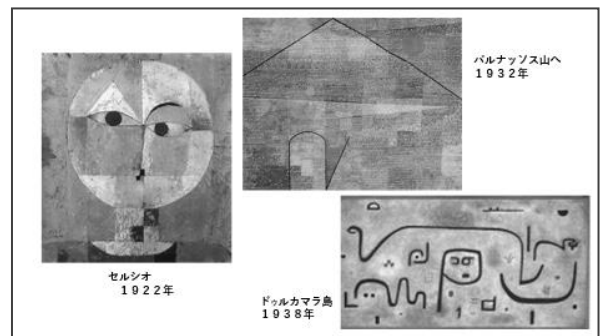


最後に『ブロード ウエイ ブギウギ』を紹介した。晩年の代表作である。ダンスが趣味であったモンドリアンは、亡命したニューヨークで喧噪とネオンの輝きを放つニューヨークの街、ブロードウェイの音楽とダンスを彷彿とさせる楽しく華やかな作

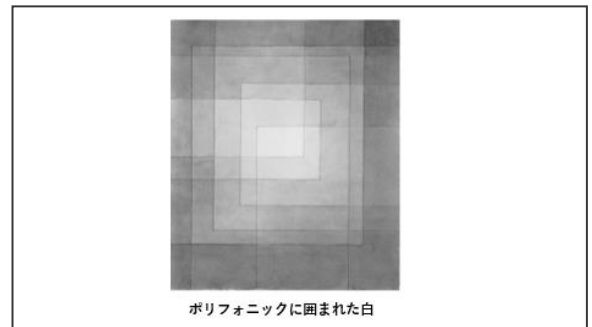
品を描いた。このモンドリアンの作品から、本格的に音楽を絵画表現した作品があることを紹介していった。

イ パウル・クレーの作品を通して

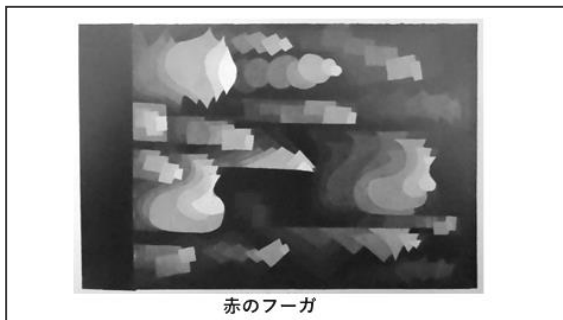
モンドリアンの次にクレーの作品を取り上げた。クレーは、プロのバイオリニストとして音楽家としても活躍しており、音楽に対する知識や教養が深い。音楽と美術の関係を探究し音楽を絵に表す試みを探究した。クレーの作品は、この観点から鑑賞することによって、今回のねらいを達成するために非常に適した教材となる。



まずは、クレーの多彩な表現を鑑賞した。音楽をテーマにしていなくても、色遣いや形、構成は音楽のメロディーやリズムを連想させる画風である。

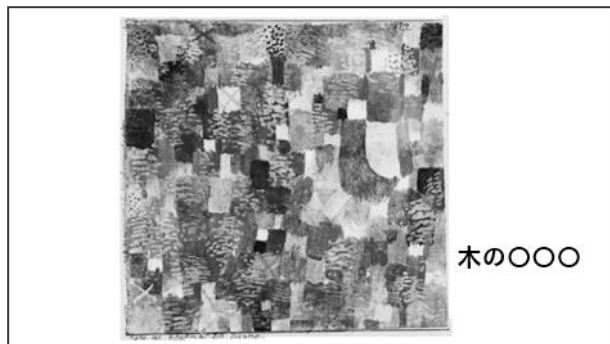


複数のメロディが複雑に絡み合う音楽を表す用語であるポリフォニックという音楽用語が題名に使われている。中央の白色をかこっている複数の四角形やピンク系統の色合いが複雑に絡み合い音の奏で合いを感じる作品である。

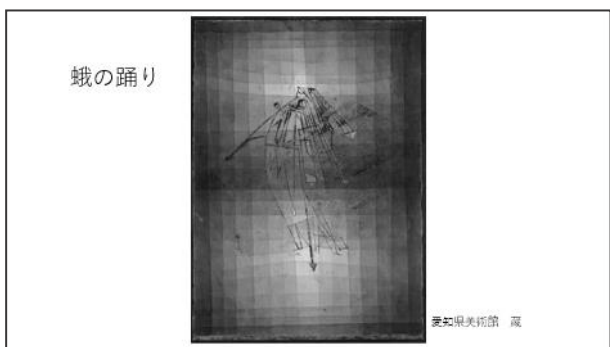


タイミングと調を変えながら同じメロディを奏でていくフーガを表した作品である。

薄い影はエコーを帯びているようにもみえる。△や□の形が左から右へ大きさや色を変えながら変化して動きがある。この動きがフーガのメロディを思わせる。白、灰、黒の同系3色で和音を表しているとも言われている。



この作品は題名『木のリズム』の最後を「〇〇〇」として想像させた。色彩が、葉の緑、幹の茶系、花や実の赤と連想させ、形や色の面積が微妙に変化している。ランダムに連続して画面を埋め尽くしており、これがリズムを生んでいる。音楽の要素を描いた画家であることが見えてくる。



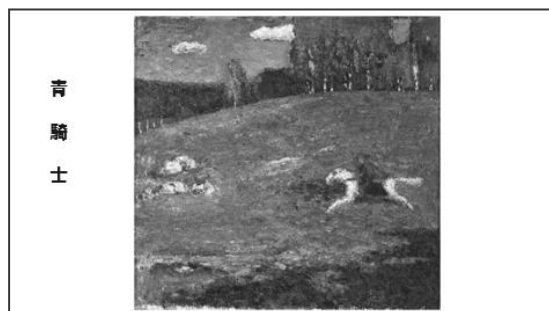
矢でダメージを受けた女性が空中に浮いている姿は踊っているようにも錯覚する。青系の色彩のグ

ラレーションとフリーハンドによる格子状の地はたわんでいてリズムの変化を感じさせる。

「蛾の踊り」の作品は愛知県美術館に収蔵されており、実物を見に行くことが可能であることを伝える。子どものような無垢な視点で色彩豊かに描かれた親しみのある作品は音楽を奏でる作品として鑑賞することができた。

ウ カンディンスキーの作品を通して

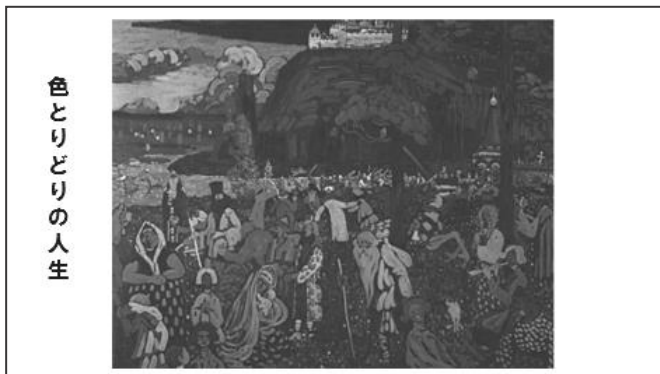
「抽象画の父」と呼ばれるカンディンスキーもピアノ、チェロを嗜み音楽に親しんでいた。加えて共感覚をもっており、色に音を聞き、音に色を見たといわれている。国内の複数の美術館で作品が常設されており、日本でも人気の芸術家である。



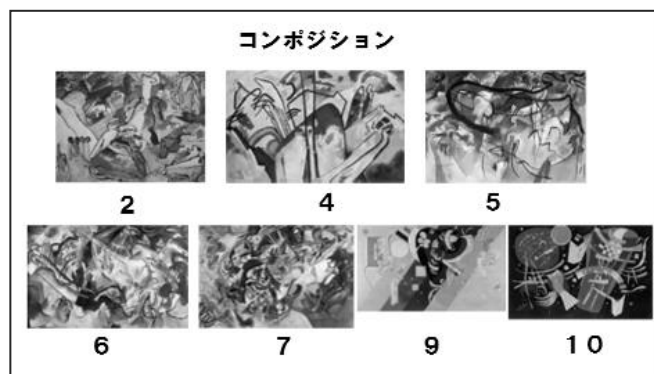
初期には、風景画を熱心に描いていた。モネの『積みわら』の作品に影響され、具体的に何を描いたのか分からなくても、芸術性をもった作品として成立するということを悟り、抽象画というジャンルの確立へと進んでいった。



人物画も描いている。鋭い観察眼と正確な描写により写実的に表現をする描画力をもっていることが伺える。



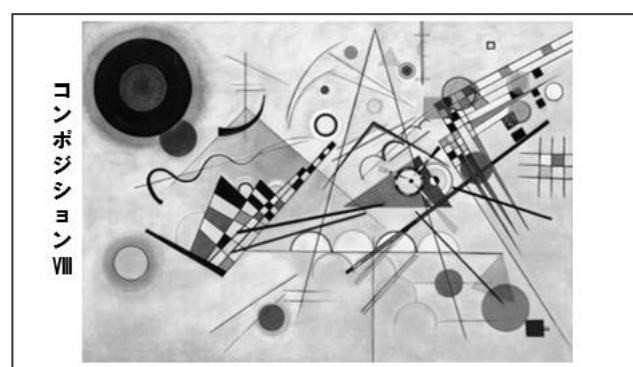
初期の作品の傑作のひとつとして紹介した点描画法で描いた作品である。大胆で明るい色づかいと画面いっぱいに様々な人間の姿が遠近法で埋め尽くされている。ざわめきだけでなく、笛の音色や音楽も聞こえてくる。色とりどりの豊かな色彩と画面から感じられる音は、カンディンスキーの「音を感じる不思議な絵」が生まれる前兆として紹介するのにふさわしい作品である。



コンサートの作品の後から、コンポジションシリーズを紹介した。すべてが音楽を表したものではないが、豊かな色彩や形で混沌としたカオス的な画面は音楽的な要素も感じられる。コンポジションシリーズは、30年間をかけて10点のシリーズとして完成された。各作品ごとに鑑賞した後、このように一度に見ることで、抽象画として確立していく様子をとらえることができた。



アルノルト・シューンベルクのコンサートを聴き感動して描いた作品である。コンサートの場面や特定の曲について描いたものではなく、全体の印象を表現している。形をなさない黄色で音楽を表し、画面になだれ込むように描かれている。聴衆は線で表されており、音楽にどんどん引き込まれている。題名もまさに『コンサート』である。この作品を紹介することで、音楽を絵にした画家カンディンスキーを知り知識を広げる事に繋がった。

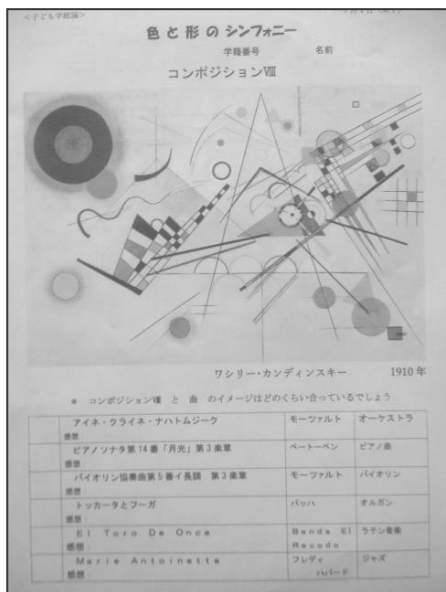


大小様々な円や半円、四角形、三角形、線が無秩序に構成されており色彩も豊かである。淡く明るい色調の背景の中で色や形が互いに響き合い、黒い線によってリズムカルに刻まれている。画面左上の大きな黒い円はすべてをまとめあげるような存在感である。コンポジションシリーズの中で一番音楽的だと感じる作品として取り上げた。

このコンポジションの作品を表現する音楽を考える活動を取り入れた。コンポジションを鑑賞しながら、様々なジャンルの曲を聴き、より作品のイメージを表す曲について◎○△×で考える活動である。どの曲がふさわしいかという正解を問うものではなく、人によって様々な感じ方あり、評価が分かれることは当然であり、鑑賞する過程やその理由を探る過程で感性が磨かれていくことをねらいとした取組であることを明確にした。好みの曲であるとか、思わぬ選曲に驚くとか、楽器の音色の違いなどに敏感に感性を働かせながら聴いて鑑賞することで、さらに作品に対して新たな気づきがあって鑑賞が深まる活動でもあった。

この活動を下記のようなプリントを用意して臨んだ。ここで扱った曲は10曲である。最後の欄には、自分が選ぶならどのような曲かを書き入れることができるようにした。

選曲は明らかにイメージとのギャップがある曲と思われるものも入っている。選曲や曲数場合によっては聴く順番などによっても、影響が出るかと考えるが、目指すことは、音楽と美術作品は互いに音や色・形などで、それぞれを表現できる可能性があることを認識することであるので、あまり神経質になって選曲したものではない。



<選曲した曲> * 演奏順

クラシック

- ① アイネ・クライネ・ナハトムジーク
→モーツァルト オーケストラ
- ② ピアノソナタ第14番「月光」
→ベートーベン ピアノ曲
- ③ バイオリン協奏曲第5番イ長調 第3楽章
→モーツァルト バイオリン曲
- ④ トッカータとフーガ
→バッハ オルガン

ラテン音楽

- ⑤ E I Toro De Once
→Banda E I Recodo

ジャズ

- ⑥ Marie Antoinette
→フレディ ハバード

エレクトロニック (テクノ)

- ⑦ Jaguar
→The Astec Mystic

クラシックとジャズの融合

- ⑧ ラプソディ・イン・ブルー
→ガーシュイン

ロック

- ⑨ Pagan Pt. 2
→Vitalism

ポップス

- ⑩ インドの歌
→ボストンポップスオーケストラ



※カンディンスキーについては、図画工作科5年生（開隆堂出版株式会社）の鑑賞の題材で扱われていた。

エ 幼児・児童の作品を通して

一連の芸術家の音楽と美術が融合したハイレベルな作品はプロだからこそ生み出せるという感覚になりがちである。そうではなく、誰もが同様な視点で表現できる可能性を秘めていることを確認するために、最後に幼児と小学校低学年の作品を扱った。

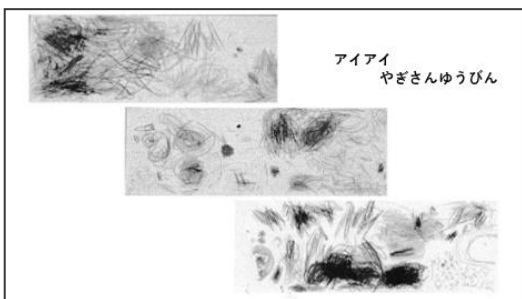
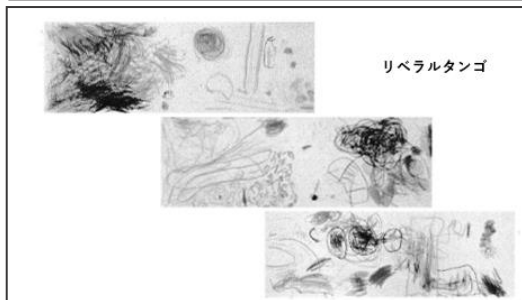
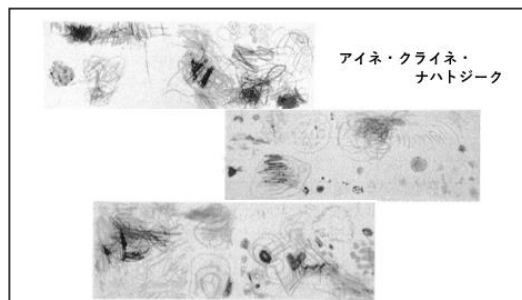


※2年生 題材「ぼかしあそびで」 日本文教出版

題名や学年を伏せて紹介し、純粹に作品から受ける感想をもたせた。柔らかな線の動きや重なり、色合い、そして、ト音記号などの音楽的要素がストレートに表されていることから、音楽を感じる作品であることを想像することができた。これが、小学校2年生の作品であったことは大きな刺激になった。

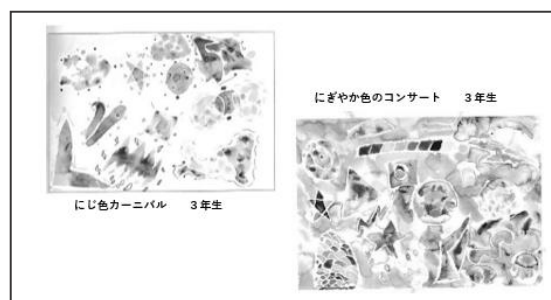
初めから、計画性をもって制作せず、感じたままに自由に描きこみ、出来上がった画面から「おんがくのせかい」と命名したことも改めて意識を変えることにつながった。特に年齢が低い場合は、構想を立てるのではなく、思いつくままに試行錯誤しながらつくり上げる過程を重視し、そこから魅力のある作品が多く生まれることを確認した。

次に、幼児が音楽を聴きながら、グループで絵を描くという活動から生まれた作品を鑑賞した。各々の作品を詳細に分析するのではなく、子ども達の表現力を高める工夫として確認した。ここでも、クラシック、タンゴ、童謡と、ジャンルの違う曲を扱っている。子どもには難しいのではないかという先入観をなくし、曲のイメージをもとに子ども達に提供している。

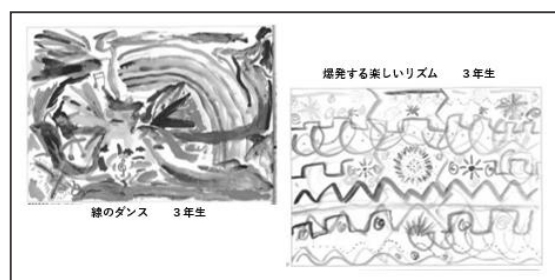


※幼児期のこどもにおける
音楽と絵画の関係性についての一考察より

小学校では、3年生「にじんで広がる色の世界」「絵の具と水のハーモニー」という題材から、音楽的なイメージを表現した作品を鑑賞した。



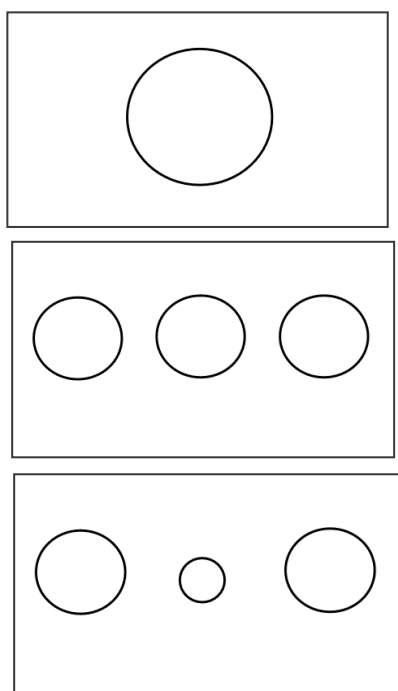
※3年生 題材「にじんで広がる色の世界」開隆堂出版



※3年生 題材「絵の具と水のハーモニー」開隆堂出版

5 考察

この授業の最初に、○に合わせて両手で音を表現する活動を取り入れた。事前に打ち合わせることなく、1つ大きく叩く、3回同じ大きさで叩く、強弱強と変化をつけて叩くと全ての学生が同じように叩いた。すでに、多くは経験済みの動作であることが予想されたが、あらためて、視覚的に見たことを聴覚を通した音で表現することが、決して珍しいことではないことを想起することとなった。



この導入で、授業で取り組もうとしていることをある程度つかむことができたと考える。

—学生の振り返りから— ※一部抜粋

- 子どもの作品でも、見る人の創造力や感性を養うことのできる力がある。
- 音楽は好きだが、美術は自ら詳しく知ろうと考えたことがなかったが、関連性を知ることができ、楽しかった。子どもの感性を豊かにすることだけを目指せず、自分も芸術を楽しんで一緒に成長していけるような保育者になりたい。
- 芸術や音楽に触れる機会が少ないので、この授業で音楽を聴いたり芸術家の絵を見ることができたりして貴重な体験になった。

- 図画工作と音楽は別物だと考えていた。しかし絵で音楽を感じ、音楽を聴いて絵を表現することは、創造力や表現力を高めるきっかけになる。
 - 音楽と美術は全く別の物ととらえていたが、音楽と美術を関わりながら行うことによって、より感性が豊かになり、表現する力がつくと学んだ。
 - 音楽と絵には接点はないと思っていたが、絵から音を表現できたり、絵と曲のあっている部分が見つけれられたりと興味を惹かれてためになった。教育者としてこのような感性は必ず役に立つので大切にしたい。
 - 絵から音や音楽を想像したり、絵にあった音楽があったりして楽しかった。絵から創造できることは、人それぞれ違うことが面白いと思った。同じ音楽を聴いて絵を描いても全然違う絵になることがおもしろい。
- このように、改めて美術と音楽は互いを表現しあうことができる芸術活動であることを認識した。同時に指導者として「指導」という視点ばかりでなく、自分自身が学び、感覚を磨くことの大切さを学んだ姿が多く見られた。また、後期に全員が「図画工作」の授業を受講する事になっていたため、図画工作の授業の意義についても気づく機会となった。

6 まとめ

学生にとって、音楽も美術もテクニックを磨く努力は当然必要であるが、そのことにより、各々の分野しか見えなくなることも考えられる。想像力や表現力を高め豊かな感性を培っていくためにもどちらかの狭い分野しか知らないのではなく、関連性をもって学ぶ視点をもってほしいと考えたが、その一端を担えた取組となった。

<参考資料>

- ・幼児期のこどもにおける音楽と絵画の関係性についての一考察 栗木浩二・落合知美 共著
- ・日本文教出版 図画工作科教科書
- ・開隆堂出版株式会社 図画工作科教科書